

## 4554 富士製薬工業

今井 博文 (イマイ ヒロフミ)

富士製薬工業株式会社代表取締役社長

### 下期は大幅に回復し上期の不振をカバー

#### ◆上期業績は減収減益

2012年9月期第2四半期は、主力のX線造影剤2品目で売上が減少したことを主な要因とし、売上高は97億79百万円(前年同期比9.0%減)となった。営業利益は9億74百万円(同42.2%減)、経常利益9億77百万円(同42.1%減)、純利益3億13百万円(同69.9%減)である。減益要因として、第1四半期に退職給付債務の増加額3億64百万円を特別損失として計上した。また、昨年新工場棟を立ち上げたことにより償却費・リース費等の固定費が増加しているほか、その本稼働が半年遅延したため、売上原価率が前年同期比2.9ポイント上昇した。販売管理費は横ばいで、通期でも前期並みに抑える計画である。

大きなマイナス要因は当上期に全て処理しており、下期以降の業績は売上・利益ともに確実な回復を見込んでいる。X線造影剤は市場の需要に応じて回復し、ホルモン剤も伸長が期待できる。したがって、通期業績予想は、売上高217億円(前期比0.4%増)、営業利益27億75百万円(同22.2%減)、経常利益27億80百万円(同21.6%減)、当期純利益14億5百万円(同36.3%減)とする。営業利益の減少要因として、下期の薬価改定の影響により、売上原価率が前期比3.6ポイント上昇する見込みである。原価で7億85百万円の増加となるが、このうち5億円弱は減価償却・リース費の増加分4億27百万円を含む製造経費の上昇が要因である。

#### ◆主力の造影剤は回復の見通し

薬効別売上高として、診断用薬では、オイパロミンの上期実績が28億円であるが、下期は大幅に回復し34億74百万円、通期は62億74百万円(前期比6億2百万円増)、イオパークの下期見込みは9億65百万円、通期で17億5百万円(同1億48百万円増)が見込まれ、診断用薬合計は通期で85億65百万円(同4億13百万円増)とする計画である。ホルモン剤では、ルナベル®配合錠の下期見込みは14億41百万円、通期で24億39百万円(同1億68百万円増)、HMG筋注用の下期見込みは4億70百万円、通期で9億8百万円(同27百万円増)、注射用ソル・メルコートの下期見込みは3億46百万円、通期で6億69百万円(同55百万円増)、デキサート注射液の下期見込みは3億61百万円、通期で6億69百万円(同65百万円増)を見込み、ホルモン剤合計は、70億90百万円(同3億86百万円増)と予想している。このほか、通期見込みでは循環器官用薬9億55百万円(同1億12百万円増)、体外診断用医薬品8億30百万円(同20百万円増)、抗生物質・化学療法剤8億3百万円(同51百万円増)、泌尿・生殖器官系用薬4億5百万円(同13百万円増)、外皮用薬2億82百万円(同32百万円増)の計画である。その他として、リマプロストアルファデクス錠の下期見込みは1億87百万円、通期で3億32百万円(同48百万円増)を見込むほか、今期発売の新製品の上期実績は8百万円だが、下期見込みは1億17百万円、通期で1億25百万円に拡大することが見込まれ、通期合計で27億70百万円(同1億93百万円増)の計画である。

X線造影剤の販売状況に関し、オイパロミン注およびイオパーク注の2品目に関し、当社から代理店等販売委託先・卸への出荷実績と販売委託先・卸から医療機関への納入実績を薬価換算ベースで比較すると、2011年10

～12月の当社からの出荷は21億69百万円であるのに対し、医療機関への納入は30億72百万円、2012年1～3月の出荷は26億80百万円であるのに対し、納入は26億6百万円である。これは、主要販売委託先であるコニカミノルタ社において当上期中に流通在庫を大幅に圧縮することとなったため、当社からの出荷は大幅に減少したが、医療機関への納入実績は順調に推移した。3月末時点で適正な在庫量となり、下期は医療機関への納入における順調な伸びに即した出荷となるため、この2品目で上期比25%増を見込んでいる。

医療領域別の通期売上高は、主にDPC対象病院向けの急性期医療領域で131億80百万円(前期比2億20百万円減)の見通しに対し、女性医療領域で67億70百万円(同2億14百万円増)、その他の領域で17億50百万円(同83百万円増)を見込んでおり、急性期医療の減少を女性医療の伸びで補う形となる。投与経路別の通期売上高は、注射剤が147億円(同4億3百万円減)、経口剤が51億円(同5億53百万円増)、外用剤が10億80百万円(同45百万円減)、体外診断薬他が8億20百万円(同27百万円減)と見込んでおり、経口剤のみ前期実績を上回る見通しである。

### ◆財務内容は安定

貸借対照表では、資産合計が295億32百万円(前期末比2億25百万円減)、純資産合計が212億96百万円(同32百万円増)で、自己資本比率は72.1%となった。資産の部では、新工場棟の機械装置の一部についてセール・アンド・リースバック取引を行ったこと等により、固定資産が10億円減少し、現金および預金が5億90百万円増加したほか、棚卸資産や売上債権が1億90百万円増加するなど流動資産が増加した。負債の部では、法人税や賞与の支払いにより流動負債が減少したが、退職金給付債務の計算方法変更に伴う引当金の増加により固定負債が増加している。また、長期借入金13億円の返済を行った一方で10億円の短期借入金を行っており、結果として負債合計は82億36百万円(同2億56百万円減)となった。

現金および現金同等物の四半期末残高は58億56百万円(前期末比29億38百万円増)となり、その主な増加要因は、設備のセール・アンド・リースバック取引を行ったことによる有形固定資産売却による収入が約16億円であったこと、並びに前期に実施した東証2部上場時の増資である。

### ◆中期ビジョン:2015年当社の姿

中期ビジョンでは、「当社が設立50周年を迎える2015年までに、既存コア事業の拡大と、次の時代につなぐ新規事業機会の具体化を実現すること」を重点課題としている。中長期の基本方針は、当社「らしさ」にこだわり続けることで、当社が得意とする特定領域で勝てる戦いに集中し、それにより独自の企業価値の持続的向上を目指す。

2015年の当社の姿として、まず、新たな注射剤を軸に急性期医療事業を拡大させる。このため、バイオ後続品のG-CSF製剤を布石とし、がんの診断(主力の造影剤)からがんの治療へ対象領域を拡大するとともに、「Gxプラス」(臨床開発が必要な付加価値ジェネリック医薬品)、DDS製剤、D&D(ドラッグとデバイスの組み合わせ)製剤などの抗がん剤の充実を図っている。次に、女性医療のリーディング・カンパニーを実現する。産婦人科領域でホルモン療法を全てをサポートする体制を整備するとともに、新薬開発と並行して積極的にブランド薬の承継を図り、ジェネリック薬とブランド薬のシナジーモデルを構築する。また、研究開発を真ん中にした事業運営体制の構築を目指す。研究開発を軸に事業のラインバランスを再設計しており、新たな研究開発センターが富山市内に来春完成予定である。さらに、海外での事業展開を推進し、新たなジェネリック薬競争優位を築く。事業エリアを拡大するため、海外での事業投資を最優先して検討を進めている。

重点課題への具体的な取り組みとして、既存コア事業の拡大については、昨年末に立ち上げた新注射工場棟が4月から本稼働に入り、主力造影剤の生産能力が倍増した。DPC対象病院への納入実績は、当上期に14施設を新規開拓し1,286病院となった。また、シェアトップを誇る経口避妊剤のジェネリックを7月に上市予定である

ほか、主に女性医療向けのブランド薬数品目について国内大手製薬数社と承継販売を協議中である。超低用量LEPの月経困難症治療薬については、共同開発先において承認申請の準備を進めている。新規事業機会の具体化については、昨年末に日本初のバイオ後続品 G-CSF 製剤の承認申請をし、2013 年の発売を目指している。G-CSF 製剤の新製造ラインでは高度な無菌性保証を構築し、8 月から稼働を開始する。また、抗がん剤注射剤新製造ラインの導入工事は今年 3 月に着工し、来年 4 月に完成予定である。抗がん剤 DDS 製剤については自社開発品と導入品によりパイプラインの充実を図っている。特にリュープリンについてはほぼ製剤化のメドが立ち、展開を加速するため臨床開発について国内大手数社との共同開発協議に入った。これらのほか、国内外製薬企業数社と戦略的アライアンスの具体化を継続検討している。

中期経営計画としては、2015 年 9 月期に売上高で 350 億円、営業利益で 70 億円、経常利益で 70 億円、当期純利益で 43 億円を目指す。今年度は基本戦略を見直し、新たな成長ドライバー獲得および M&A の検討に本腰を入れている。また、積極的な事業投資により、新規の事業機会を創出し、新たな成長路線への転換を図っていく。

### ◆ 質 疑 応 答 ◆

**ルナベル®配合錠の伸びが急速に鈍化している要因は何か。**

上期は X 線造影剤と同様の傾向があり、当社からの出荷よりも卸からの納入が上回って推移した。競合品の影響による多少の鈍化はあるが堅調であり、潜在需要もある製品で市場の拡大が見込める。在庫調整はほぼ一巡しており、下期は伸びが大きくなる。

**抗がん剤のジェネリック開発には知財問題が障害となると聴くが富士の開発は大丈夫なのか。**

抗がん剤は知財関係が複雑で、添加剤・製剤・処方に関する特許が込み入っており、物質特許が切れても容易にジェネリックが出せる状況でないことは事実である。当社なりに調査し、先発の特許に抵触せず且つ安定な製剤を実現する最善と思われる方法で開発を進めているものの、リスクは残っている。

**リュープリンのジェネリックで開発のエンドポイントは何なのか。**

リュープリンのジェネリックに関しては動物を使用した薬物動態の試験は行っているものの、人に投与して先発と同じ効果が出るかの臨床確認が必要であるなど、まだ課題が多い。例えば、前立腺がんは、テストステロンを下げればある程度がんの進行が止まることから、エンドポイントはまずテストステロンを考えているが、それだけではジェネリックとして承認が下りない可能性があるため、できるだけ薬物動態を合わせることを主眼に現在開発に当たっている。

(平成 24 年 5 月 10 日・東京)